

学校から帰って農作業をする子どもたち



## 少数民族モンを訪ねる ～思い出した賢治の詩

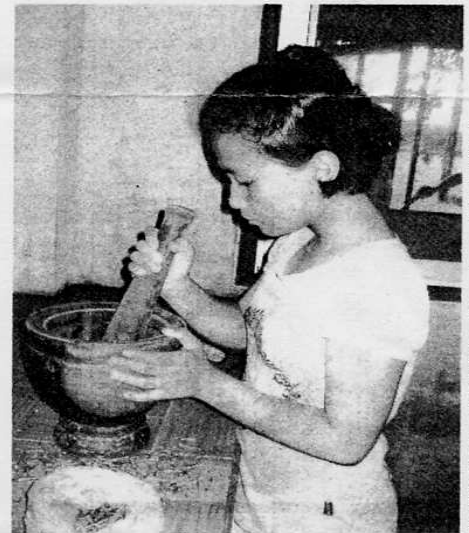


今回はタイ北部の山岳少数民族モンを訪ねるスタディツアーだったので、泊まったのも学生寮、平地に住むモンの家、山岳地帯のモン族運営のロッジ、そしてチェンマイのホテルなど多様だった。

三泊したシャンティ学生寮は山口県のNGO・シャンティ山口が貧しいモンの子どもたちが学校に行けるように建てた寮である。

ここで宮沢賢治の詩「雨ニモマケズ」を思い出した。

「雨ニモマケズ、風ニモマケズ、雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ丈夫ナカラタラモチミイツモシズカニワラッテイル。一日ニ玄米四合ト味



唐辛子をすりつぶす最年少12歳の少女

噌ト少シノ野菜ヲタベシ西ニツカレタ母アレバ、行ッテソノ桶ノ東ラ負イ...

賢治が東北方の貧しい稲作農民の姿を手帳に書き留めたものである。この詩が寮のモンの子どもたちの生活を表現しているように思えたのだ。

玄米ではないが「一日四合の米と味噌と少しの野菜」の味噌を唐辛子に変えれば寮の食事とそっくりになる。

モン族は稲の民。彼らの先祖は中国の貴州省に多く住んでいた。今でも中国には五百万人前後のモン族が住んでいる。ただし中国で

はミャオ族(苗族)と呼ばれる。それは稲の苗を持って移動したことに由来するという。

が、彼らはミャオと呼ばれることを好まずモン(自由の民)と自称する。(ミャオはタイ語では猫の意味) シャンティ寮にいるのは中一から高三までの子どもたちだが、学校から帰ると農作業し、自分たちが食べる米を作る。土、日曜は午前と午後に農作業をする。

貧しいため副食が少なく、三食とも米が中心なので、一日に四合を食べる。自分たちが作る米だ

けでは足りないので、作った新米の半分は売り、その金で古米を買う。これで米の量は倍になるらしい。おかずが足りない。フライパンのスラムでは塩をかけて食べるのを見たが、ここでは唐辛子をすりつぶし、草や野菜を少し混ぜ、漬物の役割を果たすものを作って食べる。食器は一人一枚のアルミの皿とスプーン、皿には六つの凹みがあるが、三つの凹みは空のことが多い。生活は貧しい、しかし彼らは貧しさを感じさせない。賢治の詩のように「何にも負けない」力強さがある。家族と離れていても勉強できることに誇りを持ち、一人々々の目は輝いていた。(元山口放送取締役ラジオ局長)



モンの子どもたちの明るい笑顔

—シャンティ山口教育支援募金にご協力をお願いします。—